様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３４４

研究課題名（和文）オーストラリア文学に見るグローバル化と文学の変容

研究課題名（英文）Globalisation and Transformation of Australian Literature

研究代表者
佐藤　渉（Sato, Wataru）

立命館大学・法学部・准教授

研究者番号：３０４１１１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はオーストラリアの移民系作家と先住民系作家のフィクションを研究対象とし、同時代文学において主体性やアイデンティティ観にどのような変化が見られるのか検証した。本研究の成果として、生物学的・文化的本質主義に基づく固定的なアイデンティティ観から、多様で構築主義的なアイデンティティ観への変化が明らかとなった。さらに同時代文学の特徴として、主体性が複数の文化の接触領域における衝突や交渉を通じて常に変容し、新たに生成するものとして捉え直されつつあることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study has explored contemporary Australian fiction by migrant and indigenous writers. Throughout the study, a shift in the notion of identity was observed, namely, from static one based on biological and/or cultural essentialism, to pluralistic, constructionist one. In addition, subjectivity in recent works has been characteristically reinterpreted as amorphous, one that can be transformed as a result of cultural confrontations and negotiations.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：オーストラリア文学　アイデンティティ　移民文学　アボリジニ文学　多文化主義

１．研究開始当初の背景

文学研究の分野で「ディアスポラ」の文学が注目を集めるようになって久しい。その背景として、まずはポストコロニアル文学研究の進展をあげることができよう。さらには、グローバル化の進展に伴い、母国を離れ、母語以外の言語で書く作家が次々と登場している時代状況も深く関わっている。ディアスポラ状況は国境の内側においても生起する。たとえば旧植民地では、伝統的な生活の場や言語を奪われた先住民が、故郷喪失状態に置かれてきた。こうした何らかの離散状況は、世界各地でもはや日常的事態となっており、国境によって区切られたナショナルな枠組みだけでは捉えきれない主体意識や帰属意識が生まれていると推測される。

ディアスポラ状況に置かれた人びとにとって、文学は祖国喪失の経験を語り、記憶の中の祖国を探求する重要な手段となりうる。もはや想像の中にしか祖国を持たない作家たちの中には、フィクションの力によって祖国を「創造する」仕事に取り組む作家も見られる。こうしたディアスポラの文学は、複数の文化と歴史のはざまで揺らぐ主体を前景化しており、ポスト国民国家時代のアイデンティティの在り方を描き出していると考えられる。

旧宗主国であるイギリスの文化を継受する一方、地理的にはアジア太平洋地域に属しているオーストラリアは、国家としてのアイデンティティを模索し続けてきた歴史を持つ。国家としての文化的正当性をどこに求めるのか。オーストラリアの主流派作家にとってこの問いは、しばしば彼らの文学的探求の核心を成していた。しかし、イギリスとの関係を軸とした国家アイデンティティ定立の試みは、第２次大戦後の南欧・東欧移民の増大や、アジアの経済的発展に伴うアジア志向の強まりと共に大きく舵を切ることになる。こうした国家政策の転換に伴い、個人のアイデンティティ意識にも変化が見られるようになる。70 年代以降、国家政策として多文化主義を掲げ、移民の導入および伝統文化の継承が推進された結果、芸術全般で文化混淆的な表現が顕著に見られるようになった。移民のバックグラウンドを持つ作家の場合、初期には移民体験を記した自伝的作品や世代間の懸隔を描いた作品が目立ったが、近年は単一的な民族アイデンティティに収斂する代わりに、多様で複層的なアイデンティティの在り方を描いた作品も目立つようになった。

国家および個人のアイデンティティが常に重要なテーマとなってきたオーストラリアの文学は、現代における主体性の変容を検証する上で、格好の研究対象となることが予測された。本研究は、オーストラリアの移民作家と先住民作家のフィクションを研究対象とし、彼らが作品を通じて表現している主体性と帰属意識を分析することを目指した。

２．研究の目的

本研究は、政府の多文化主義政策に後押しされ、文化的混淆が進展しているオーストラリアにおいて、民族アイデンティティが文学作品の中でどのように表象されているのかを検証し、その傾向と特徴を明らかにすることを目的とした。とりわけ故国を喪失したディアスポラ作家のアイデンティティがどのような特質を持つのか、また、伝統文化に依拠して集合的アイデンティティを（再）構築してきた先住民が、グローバルな文化混淆が進展する中で、民族性をどのように再定義しようとしているのか、あるいは民族アイデンティティという概念そのものが溶解しようとしているのか、明らかにすることを目指した。本研究を通じて、民族集団の違いに基づく差異が浮かび上がると同時に、共通した傾向が見つかることも期待された。

３．研究の方法

現代オーストラリア文学のうち、フィクションを主な研究対象とし、作品の分析を行った。佐藤がアジア系作家、湊がヨーロッパ系作家、一谷が先住民作家を担当した。各自が担当分野の研究を進め、研究会で成果を共有した。文献研究に加え、毎年オーストラリアの文学祭に参加し、最新動向の情報収集に努めた。さらに、各自が築いてきたネットワークを生かし、現地の作家や研究者に聞き取りを行った。研究年度 2 年目には、作家のジャニーン・リーン氏とローハン・ウィルソン氏を招き、公開シンポジウム「複数の文化・複数の歴史を書く―現代オーストラリア作家との対話」を開催し、文化間の交渉や、他者の文化について書く行為について意見交換を行った。

４．研究成果

(1) オーストラリアの先住民文学に関して明らかとなったのは、1990 年代まで支配的だった文化的・生物学的本質主義に基づくアボリジナリティ（先住民性）が、構築主義的なアボリジナリティへと変容を遂げつつあることである。2000 年代のアボリジニ文学の特徴として、イギリス系住民との関係に限定されない、より多様な民族との接触を描いた作品や、性的多様性を扱う作品が登場している。こうした傾向は、アボリジナリティが伝統文化を基盤とした回帰すべきものから、多様な境界領域における衝突や交渉の過程を経て複合的に構築されていくものとして、再定義されつつあることを示している。すなわち、伝統文化によって一元的に規定されるアイデンティティからの変化が見られるのである。

一方で、アボリジナリティの拠り所として、土地との関係が再び前景化されていることも確認することができた。これは、グローバ

ル化の圧力に対する先住民側からの反応として捉えることができよう。しかし、土地の描かれ方には変化も見られた。土地との関係を軸に据えた「帰属の物語」は従来から語られてきたが、とりわけ近年の作品に特徴的に見られるのは、核や環境問題とのかかわりから土地が描かれている点である。すなわち、現代先住民文学にはローカルな帰属意識とコスモポリタン的な問題意識が並行して書き込まれていることが明らかとなった。

(2) アジア系やヨーロッパ系移民作家の文学に関しては、エスニシティを拠り所としたアイデンティティを批判的に検討した作品が登場している。たとえば、ナム・リーやトム・チョウは、エスニシティが文化資源として流通し、消費されている現状を描き、文学的価値とエスニシティとの結託関係に鋭く切り込んでいる。とりわけチョウの文学は、グローバルに流通している民族文化の表象をパロディ化するという形で二次的に利用しており、消費と創作を一体化した極めて現代的な作品となっている。こうした若手作家の作品において、アイデンティティの探求自体は、もはや主題ではなくなりつつある。むしろ彼らの関心は、エスニック・アイデンティティが構築されるプロセスを相対化し、疑問を投げかけることに向かっている。ギリシャ系作家のクリストス・チォルカスは、多様な民族的、性的バックグラウンドを持つ個人の「関係性」から主体性が再構成されていく過程を描き出した。ここにも限定的で本質主義的なアイデンティティから動的・構築主義的なアイデンティティへの推移がうかがわれる。こうした新世代の移民系作家の作品は、これまで文学や表象芸術によって構築されてきたオーセンティックな移民像を揺るがす力を秘めている。

本研究で明らかとなった主体意識やアイデンティティ観の変容は広く英語文学全般に見られるのか。歴史的背景や社会的・政治的状況を反映して地域毎の独自性が見られるのか。こうした観点に基づく他地域の英語文学との比較研究が今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① 一谷　智子、「核とオーストラリア文学―B. ワンガーの写真集と連作小説を巡って」、『オーストラリア研究』第 27 号、2014、pp.80-93、査読無.
② Sato, Wataru. “The Transformative Self in Tom Cho’s Look Who’s Morphing”、『立命館言語文化研究』第 25 巻 3 号、2014、pp.57-64、査読無.
③ Sato, Wataru. “A Reflection on Ethnic Literature: Nam Le’s ‘Love and Honour and Pity and Pride and Compassion and Sacrifice”、『立命館文学』634 号、2014、pp.202-208、査読無.
④ 湊　圭史、「チォルカス The Slap に見るエスニシティとセクシュアリティの力学」、『立命館文学』634 号、2014、pp. 188-201、査読無.
⑤ 佐藤　渉、「エスニシティの境界を越えて書く―ナム・リーの短編小説に見るアジア系オーストラリア文学の新たな展開」、立命館法学別冊『ことばとそのひろがり』第 5 号、2013、pp.119-140、査読無.
⑥ 湊　圭史、「境界の言語―オーストラリア現代小説を読む」、『立命館英米文学』第 22 号、2013、pp.37-53、査読無.
⑦ 湊　圭史、「2012 年度パース国際芸術祭に見るオーストラリア文学の現状と課題」、『オーストラリア研究紀要』第 38 号、2012、pp.119-128、査読有.
⑧ 湊　圭史、「沈黙のことば―現代オーストラリア文学に見る文化の境界」、『南半球評論』第 27 号、2011、pp.20-30、査読無.

〔学会発表〕（計 4 件）

① 一谷　智子、「核とオーストラリア文学―B. ワンガーの写真集と連作小説を中心に」、オーストラリア学会第 24 回全国研究大会、名古屋商科大学日進キャンパス、2013 年 6 月 9 日.
② 湊　圭史、「境界の言語―オーストラリア現代小説を読む」、立命館大学衣笠キャンパス、2012 年 7 月 14 日.
③ 湊　圭史、「オーストラリアン・グロテスクの現在―近年の豪州小説から」、オーストラリア学会第 23 回全国研究大会、大阪大学豊中キャンパス、2012 年 6 月 10 日.
④ 湊　圭史、「沈黙のことば―現代オーストラリア文学に見る文化の境界」、オーストラリア・ニュージーランド文学会研究大会、日本女子大学目白キャンパス、2011 年 11 月 26 日.

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　渉（SATO, Wataru）
立命館大学・法学部・准教授
研究者番号： 30411143

(2)研究分担者

一谷　智子（ICHITANI, Tomoko）
西南学院大学・文学部・准教授
研究者番号： 70466647

湊　圭史（MINATO, Keiji）
立命館大学・理工学部・非常勤講師
研究者番号： 10598527

(3)連携研究者

有満　保江（ARIMITSU, Yasue）
同志社大学・言語文化教育センター・教授
研究者番号： 20097075